

敬和学園大学と地域社会を結ぶコミュニケーション誌

# KEIWA

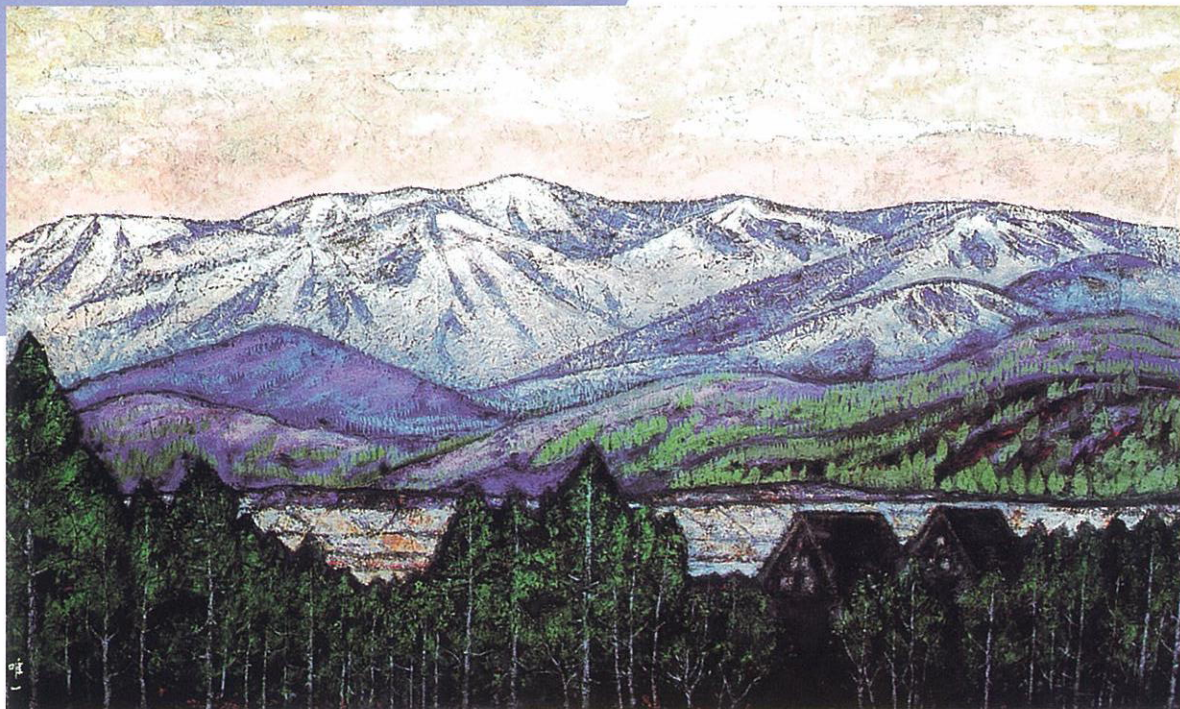
## COLLEGE REPORT



# 第29号

〈JANUARY 2002〉

発行/敬和学園大学広報委員会



CLOSE UP

## ウィーンのカフェ 桑原ヒサ子

人文社会科学研究所連続講演会  
「激動する世界と日本」

英語の『公開研究授業・  
ワークショップ』を終えて

人気授業をサーチする／卒業生は今  
退職される先生方／高校生のオーストラリア短期留学  
2002年度入学試験中間報告

# 2002



敬和祭 北海道平取町から15名のアイヌ民族の人たちが来訪

11月10日の敬和祭では、北海道<sup>びらとり</sup>平取町のアイヌ文化保存会15名のみなさんをお迎えしました。明治以降、アイヌの歴史や文化は周縁化され続け、今では、北海道各地の保存会によって細々と伝承されているにすぎません。会場で保存会のみなさんは、自然を表現した伝統的なアイヌ舞踊や歌謡を披露してくれました。舞踊、木彫り、刺繍、口琴ムックリの体験コーナーも開設され、参加者たちはその意外な難しさにてこずりながらも、時のたつのも忘れて製作に取り組んでいました。アイヌ文化が身近に感じられたひとときでした。

## もくじ

|                               |       |   |                   |         |
|-------------------------------|-------|---|-------------------|---------|
| ウィーンのカフェ                      | 桑原ヒサ子 | 1 | オープンカレッジ          | 8       |
| 人文社会科学研究所連続講演会<br>「激動する世界と日本」 | 田中利幸  | 4 | 著書紹介              | 9       |
| 英語の『公開研究授業・<br>ワークショップ』を終えて   | 柴沼晶子  | 5 | アイヌ文化に踊った学園祭      | 10      |
| ゼミ紹介                          | 上野恵美子 | 5 | インターンシップを通して      | 宮崎和代 10 |
| 人気授業をサーチする                    |       | 6 | 2002年度入学試験中間報告    | 11      |
| 卒業生は今                         |       | 6 | クリスマス礼拝           | 12      |
| 退職される先生方                      |       | 7 | 訃報                | 12      |
| 高校生のオーストラリア短期留学               |       | 8 | 敬和学園大学同窓会総会・懇親会開催 | 13      |
|                               |       |   | 学事予告／寄付者ご芳名       | 13      |

# ウイーンのカフェ

教授 桑原ヒサ子



の絵はがきを書きながらゆったりとした時間を過ごしたカフェ・シユヴァルトやベルクやカフェ・インペリアル、カフェ・モーツァルトやカフェ・ラントマンなど名物カフェの独特な雰囲気がい出されてきた。

ウイーンとカフェ、この関係は分ちがたく結びつき、ヨーロッパのカフェの営みはウイーンから始まったと思ってしまうくらいだ。しかし実際にはベニスやロンドン、ハンブルクといった都市の方がウイーンより早くアラブの飲み物であるコーヒーを知っていたのである。それにもかかわらずウイーンがヨーロッパのカフェの模範となってきたのは、ウイーンのカフェには人を惹きつけてやまぬ魅力があり、それを今でも持ち続けているからだと思う。

## カフェのメニュー、内部構造、給仕

ウイーンのカフェに座ってメニューを開いてみよう。その種類の多さに驚かぬ人はまずいない。種類といってもコーヒー豆の種類ではなく、コーヒーの色、質、量、混ぜ物、添え物の組み合わせで種類が数十種類もある。そのうえ、大中小とか濃い薄い

中位といった無味乾燥な表現ではなく、それぞれにウイーン独特の優雅ないしは奇妙な名前がついている。ウイーンのカフェで「コーヒー一杯」などと注文したら、教養のなさ丸出しになってしまう。私も初めは好奇心から、カフェに入るたびに一つひとつその種類をつぶしていったが、そのうち「シャーレ（中カップ）メランジュ（コーヒーとミルクの配合率が1対1）に落ちていた。それにパウダーシュガーが振りかけられた暖かいアプフェル・シュトゥルーデル（一種のアップルパイ）があると最高だった。

カフェ内部も一定の法則に従っている。大理石のテーブルとトーンネットと呼ばれる木の椅子、鏡とシャンデリア、窓際のボックス席。椅子は、サーカスの猛獣使いが右手には鞭、反対の左手に持っているあの椅子で、ブナ材の美しい曲線を持つ椅子である。スタンド式のコート掛けも椅子とお揃いの造りになっている。

給仕は男性というのもウイーンの流れである。そもそもウイーンのカフェからは女性には給仕としても客としても閉め出されていたのである。コンデイトライ（菓子屋兼喫茶店）が女性の行くところであるのに対

英語英米文学科と国際文化学科の両学科に共通する専門コースとしてコミュニケーション・コースが昨年度開設され、今年度からコミュニケーション演習という科目を担当することになった。履修する学生が少なかつたので、学生の関心に合わせて授業を進めることにしたら、ハプスブルク家の歴史について調べたいという学生がいた。ハプスブルク帝国の帝都だったウイーンには何度も出かけたことがあるが、これまでウイーンについてまとめる機会もなかったで、私自身にもテーマを課してみた。そこで思い浮かんだのがウイーンのカフェである。日中は宮殿や教会、美術館や博物館を見て回り、夜はオペラ座やブルク劇場へ通ったが、その間に疲れを癒し、何枚も

し、カフェの客は専ら男性であった。ところが女性解放が進むにつれ、カフェも女性客に征服されるようになる。しかし、今なお男性の職種として存在し続けているのが給仕の世界である。この職種、なんと三段階にランク分けされている。最上位にツァールケルナーあるいはオーバーケルナーと呼ばれる給仕長、次がケルナー、その下に見習いのピッコロがいる。ずいぶん大層に見えるが、この伝統的秩序への忠誠心はこの職種への誇りにつながっている。その給仕ぶりは実にスマートだし、例えば明らかによそ者の私には「ウイーンで素敵な時をお過ごしください」といった魅惑的な言葉で見送ってくれる。カフェの歴史をひもとくと、非の打ち所のない職人氣質の給仕やカフェに集まる芸術家たちをサポートした伝説的名給仕の名が何人も残っている。

### カフェの三種の神器

さて、カフェの三種の神器といったら新聞、チェスそれにビリヤードを挙げなければならぬ。

現存する記録によれば、ウイーンのカフェに新聞が備わったのは十八世紀初頭という。アイデアとして、コーヒーより新聞目当の？知識人たちを集める新聞カフェが誕生した。しかし、昼でもランプの灯りを頼りにしなければならぬ不健康な空間だったようだ。マリア・テレジアの時代にカフェで新聞を配布することや日曜祭日に新聞を読むことが禁じられたことがあったが、カフェでの新聞常備の習慣は次第に定着していった。新聞がその力を発揮し始めるのはメッテルニヒ時代が終わり、三月革命を迎え、立憲運動が活気を帯びる十九世紀半

ばである。のちに青年ウイーン派の文学カフェとして名を馳せるカフェ・グリーンシユタイドルも、開店当初から各種新聞を揃え、一八五六年には「読むのに丸一カ月はかかる」ほどの数があつたと報告されている。最高常備数を記録したのは、後述するカフェ・ツェントラールで、最盛期の一九一三年には二五二紙に及んだ。オーストリア、ハンガリー、チェコ、クロアチア、ウクライナなどの帝国内各紙はもちろんのこと、ドイツ、イタリア、フランス、ロシア、イギリス、アメリカの新聞、さらには文学、芸術、法律、農業、スポーツなどあらゆる分野の雑誌も揃っていた。当時とは比べようもないが、今日でもカフェ・ツェントラールには内外の新聞十数紙ほどが置かれている。ところで、新聞がばらばらにならず、収納もしやすいよう工夫されたウイーン独特の柄の付いた新聞掛けは、今日図書館ではお馴染みである。

ビリヤードも早くからカフェに欠けてはならぬものだった。男子十五歳にしてキューの扱いを知らなくば男子にあらず、と言われた時代があつて、特に十八世紀半ばにビリヤードで有名になったカフェ・フーゲルマンはウイーン以外からもフーゲルマン詣？をするマニアが跡を絶たなかつたそう。今日でもカフェ・シユペルルのように何台もの玉突き台を置くカフェが健在である。

一方チェスは、カフェの窓際のボックス席がチェスにおあつらえ向きだったことからカフェのゲームとして盛んになった。通行人が窓ガラス越しにゲーム観戦という光景もよくあつた。今日でもカフェ・ムゼーウムやカフェ・ブリュッケルなどチェス専

用室があり、昼間からチェスで賑わうカフェがある。

### カフェの発展とウイーン文化

ウイーンで最初のカフェが開店したのは一六八五年とされている。一六八三年はウイーンがトルコ軍に包囲され、陥落寸前の危機に陥った年である。ところがトルコ軍が突然敗走し始め、ウイーンは難を逃れる。トルコ軍の陣中にペストが流行ったからという説がある。あとにコーヒー豆が入った大袋がたくさん残されていたというわけである。

その後、ビーダーマイアー時代の一八三九年には八十八軒、ウイーンの都市改造が始まる一八五七年には百軒、環状道路（リング）が完成し世紀末文化が開花した一八九〇年には六百軒に、さらに、周辺地区のウイーン市への編入によって一層都市化が進み、最多人口を記録した一九一〇年には千二百軒、そしてヒトラーによるオーストリア併合の年には千二百八十軒を記録し、ウイーンのカフェは世界にその名を轟かせようになる。そしてその歴史の中で常に時代の政治や文化活動をリードするカフェが誕生し、ウイーン文化が育っていったのである。ここでは、そうした名物カフェの中からカフェ・ツェントラールを紹介してみたい。

### カフェ・ツェントラールとその時代

カフェ・ツェントラールは世紀転換期から第一次大戦時代のウイーンを代表する文学カフェで、ヘレン小路とシユトラオホ小路の角に現在も当時のままの風格ある店構えを誇っている。

# CLOSE UP

このカフェが入っている建物を設計したのはウイーン出身のハインリヒ・フェルスターだった。ウイーンでは一八五七年に旧市街を取り囲む城壁を取り壊し、環状道路を建設するという大々的な都市改造が始まった。そして世紀末には現在見られるような華麗な近代都市ウイーンが誕生したのだ。フェルスターはその時期に活躍した建築家で、彼の設計したイタリア・ロマン派様式の建物は銀行、証券取引所、ブティックやカフェが入る多目的建造物として計画されていた。

カフェ・ツェントラールが開店したのは、建物が完成した一八六八年のことだったが、文学カフェとして名声を馳せるのは、カフェ・グリーンシュタイドルが開店し、そこに出入りしていたペーター・アルテンベルク、ホフマンスタール、オスカー・ココシユカ、アルトウール・シユニツツラーやシユテファン・ツヴァイクらが移って来てからである。さらに、第一次大戦末期にはブラハで活躍していたユダヤ系の作家たちがチェコ化していくブラハからウイーンへ移って来た。

この店の魅力は先にも紹介したが、新聞常備数が圧倒的に多かったことである。また、客の愛読紙をすべて記憶し、間違いないテーブルに運んだという記憶力の持ち主で人情にも篤いジャンと呼ばれる給仕長がいた。店内も独特な雰囲気醸し出している。メインホールはギリシャ様式の円柱に支えられた高い丸天井に、アーチ型の大きな窓、天井から下がるクラシックなシャンデリア、マーブル模様の大石の丸テーブルにトーンネットの椅子、そして窓際のボックス席、裏手にはチェス専用室があるとい

った具合に、伝統的なカフェ構造を残している。

当時メインホールにはいくつもの芸術家グループがいて、その中でも最も存在感があったのがペーター・アルテンベルクのグループだった。俳優で作家だったエーゴン・フリーデル、無装飾建築の提唱者アドルフ・ロースや辛口の批評家カール・クラウスが仲間だったが、ここに同席することは駆け出しの作家には大変な名誉だったらしい。しかしクラウスはそのうち「カフェ・ツェントラールの雰囲気は精神に障る」と言っており、カフェ・インペリアルやカフェ・バルジファルへ移ってゆく。楽友協会に近い前者はブラームス、ブルックナー、マーラーのお気に入り、後者にはワグネルやマーラーのファンがたむろしていた。トロツキーもウイーン滞在中はカフェ・ツェントラールに通い詰め、オーストリアの社会主義者たちと親交を結ぶが、革命家とはほど遠い彼らに失望しカフェを去ってゆく。

一九一九年にアルテンベルクが亡くなること、まるでオーストリア・ハンガリー帝国の崩壊に合わせるかのように、カフェ・ツェントラールも生彩を失っていった。ちょうどその時期に同じヘレン小路にカフェ・ヘレンホーフが開店し、カフェ・ツェントラールの常連はそちらへ移って行った。その一人アントン・クーは新しいカフェについてこう言っている。

「広く明るく豪華で非人間的なブルジョアのファミリア・カフェ。ひとを見下げるボヘミアンの雰囲気からの解放。パトロンはヴァイニングアではなくなり、ドクター・フロイトになった。アルテンベルクはキル

ケゴールに席を譲り、新聞に代わって雑誌が、心理学に代わって精神分析学が、ウイーンのエスプリの微風に代わってブラハの嵐が吹き込んできた。だからこのカフェの空気は最初、反ウイーン的であり、ヨーロッパ的であった。」

カフェ・ヘレンホーフは一九三八年、オーストリアがナチス・ドイツに併合されるまでウイーン随一の文学カフェであった。しかし、それと相前後して、ユダヤ系の作家、芸術家たちはほとんどすべて国外へ亡命し、カフェから姿を消してゆくのである。

先日、同僚の松崎洋子先生から宮廷御用達コンデイトライ、デーメルケーキを頂いた。首都圏のデパートではザッハー・トルテを始め、ウイーンのケーキが空輸される。ちなみに、デーメルはカフェではなくコンデイトライなので給仕はウェイトレスである。頂いたケーキにメランジュというわけにはいかなかったが、一口ケーキを口に運ぶと懐かしい香りがいっぱい広がって、心はもうウイーン・オペラ座の前へ行ってしまった。すると、そこに軽やかなワルツのメロディーが流れてきます。その調べは、やはり「美しき青きドナウ」、でしょうか。

## 参照文献

森本哲郎「ウイーン」文藝春秋、一九九二年  
平田達治「ウイーンのカフェ」大修館書店、一九九六年  
クラウス・ティレルドールマン「ヨーロッパのカフェ文化」大修館書店、二〇〇〇年

国際文化学科教授 田中利幸

昨年十月三日を皮切りに、「激動する世界と日本」という共通テーマの下に、合計五回の連続講演会が本学の人文社会科学研究所の主催で開かれました。講師五名のうち、海外から来られたガヴァン・マコーミック教授を除いて、あとは全員が私が企画した、にいがた市民大学講座「東北アジアの記憶と未来」の講師として新潟に来られた方々でした。せっかく新潟に来ていただいているので、この機会を利用して、敬和学園大学でもお話をさせていただこうというのがこの連続講演会を企画した発端でした。幸いに、本学の人文社会科学研究所の全面的な支援のもと、十一月二十八日に無事に全プログラムを終了することができました。



作家 小田実氏

第一回目の講師は、「ベトナムに平和を市民連合」や「神戸大震災被災者救援運動」などの市民運動のリーダーとして広く知られている作家の小田実さんでした。「九・一一ニューヨーク・テロ事件」の記憶もまだ生々しく、アメリカのアフガン攻撃が始まるという緊

迫したこの時期に、長年にわたる平和運動に関

わってこられた小田さんによる講演「テロに対する報復戦争は正当か?」は、まさにタイムリーなものでした。テロに対する報復戦争批判こそ、真の友人としての日本がアメリカに伝えるべきメッセージであるという主旨の講演内容は、一貫して非暴力・平和主義を唱えてきた小田さんの思想を再確認するものでした。聴講された一〇〇名近い新発田市民の皆さんや学生諸君にも、訴えるところが多くあったと思います。

第二回目の講師は、日本研究家として著名なオーストラリア国立大学教授のガヴァン・マコーミック先生でした。現在日本が直面している未曾有の財政危機がいかに深刻であり、その原因が税金の無駄使いとしての公共投資や、全く生産性を伴わないリゾート開発投資にあることを具体的な諸例をあげて鋭く指摘されました。

第三回目の講師には、これまで日本では広く知られているジャーナリストの松井やよりさんをお招きしました。松井さんは現在「アジア女性資料センター」、「戦争と女性への暴力・日本ネットワーク」という二つのNGO組織の代表をされております。近年は元慰安婦であった女性たちの名誉回復のために努力をされてきたばかりではなく、戦争のたびに起きる「軍隊による性暴力」をなくすために世界的な規模でのキャンペーンを練り広げられています。一昨年末に東京で開かれた「女性国際戦犯法廷」のビデオを使った講演に、聴講に来られた多くの女性市民の方々が熱心に耳をかたむけておられたのがたいへん印象的でした。

の専門家として知られている歴史研究者の笠原十九司先生でした。最近論争をよんでいる「教科書問題」にも触れる笠原先生の講義には、平和構築と維持のために、戦争の「おぞましき」をいかに私たち共通の記憶として伝承させていくことができるかについて、考えさせられるところが多々ありました。

ピーブルズ・プラン研究所共同代表で元ニューヨーク州立大学客員教授の武藤一羊先生の講義は、最終回にふさわしい内容のものでした。「激動する世界と日本」において現在猛烈な勢いで進行中の「グローバルゼーション」という世界的な規模での現象が、テロ事件、財政危機、教育費・福祉医療費カット、貧富格差の拡大、リストラ、企業競争原理の強化などの様々な問題とどのように密接にかつ複合的に関連しているかについて、武藤先生は簡明に分析されました。ともすると次々と起きる目先の問題に追われて、それらの問題が地球的規模でどのように関連しているのかに目がいかない私たちには、たいへん有意義な講演内容でした。

この連続講演に毎回キャンパス外から多くの市民の方々が参加され、中には五回全での講演に顔を出された方たちもおられたことは、企画者にとってはいへん嬉しいことでした。



ピーブルズ・プラン研究所共同代表 武藤一羊氏

# 英語の『公開研究授業・ワークショップ』を終えて

英語英米文学科教授 柴沼晶子

去る十二月八日(土)に敬和学園大学英語科教育法カリキュラム開発研究会主催の英語の公開研究授業と実践的英語指導のワークショップを行いました。

休日であるにもかかわらず、県下の中学校と高等学校の先生方が五十人ほど参加してくださり、大変有意義な会を持つことができました。

この公開研究授業は、昨年度と本年度文部科学省から『教職課程における教育内容・方法の開発』研究事業を委嘱され、右にあげた長い名前の研究会を発足させて、共同研究を行ってきましたので、その実践



公開研究授業報告会

報告会として企画したものです。

委嘱研究の内容は、一つは、初級レベルの授業に教職課程を履修している学生がティーチング・アシスタントとしてネイティブの教員による授業の中で実際に役に立つ英語の指導法を学ぶというプロジェクトです。もう一つは、地元の聖籠中学校で学習支援活動を行ういわゆるインターンシップです。今回は、前者のプロジェクトを中

心にして、それ実際の本学での英語の授業に先生方に参加していただくというワークショップの形式を加えてプログラムを作りました。

当日は松崎洋子先生の司会の開会式で始まり、午前中はティーチング・アシスタントを使った英語の授業を四セッション、午後は四十分間のワークショップ九セッションを二コマに分けて行いました。内容はインターネットを使った英語の授業、対話や読み方、ペアワーク、グループワークを使った授業など多岐にわたり、参加者も熱心にまた楽しそうに授業での活動に取り組まれました。最後のセッションでは、益谷真先生の司会により参加者から活発なご意見やご質問をいただき、北嶋藤郷英語英米文学科長の閉会の辞で幕を閉じました。

授業の内容やプログラムはジョイ・ウィリアムズ先生を中心に金山愛子、中村義実両先生が練りに練って策定され、優れた講師や外国人のスタッフに多く恵まれた本学の英語教育の特徴が遺憾なく発揮することができました。参加者のアンケートにも満足との感想をいただき、是非このような会を今後も続けてほしいという要望が多く述べられております。

これを出発点に現場の英語の先生方との交流を促進したいというのが私ども一同の願いです。

## ゼミ紹介

英語英米文学科教授 上野恵美子

本年度私は「英語学演習Ⅰ、Ⅱ」(二年次)と「英語学演習Ⅱ」(四年次)を担当しています。

演習Ⅰ、Ⅱでは「私たちのことばに意識的になる」ことをめざして、ふたつのことをしています。ひとつは、英語で書かれたものを読むこと。材料はアメリカ人が日本語と日本文化について、英語・アメリカ文化と比較しつつ書いたものです。決められた担当者が要約とコメントをし、他の学生はそれに対して質問やコメントをします。もうひとつは、「私たちのことば」についての発表で、学生が関心をもった「ことば」の例を紹介し考察したり、ことばについて述べた新聞・雑誌記事等を紹介するものです。おもしろいものいろいろ出てきます。これは学年末にまとめて、演習外の方々に何らかの形でご紹介できればいいと考えています。

本年度の演習Ⅱでは、昨年演習Ⅰで学んだ意味論・語用論の基礎をふまえて、文学テクストの言語分析を行っています。前期は文学テクストの分析について論じたものを読み、後期はグレアム・グリーン短編を分析しています。語り手は作中の事態をどこからながめているか、どの登場人物の視点をとるか、それがどのような言語表現となっているか、といったことを見ていきます。ある登場人物の事態認知として描かれることが、実際にそこで起きている(と読者にはわかる)ことと異なる場合などは、特に興味深いところです。

# 人気授業をサーチする

アメリカ研究A

## 知ること、考えること

英語英米文学科三年 三富 香子

アメリカという国を考える時、どのようなイメージが浮かんでくるでしょうか。人それぞれにアメリカという国に対して様々なイメージを持っていると思いますが、一つは「人種のるつぼ」、多民族国家、移民の国であるということが言えるでしょう。アメリカは移民によって発展を遂げてきた国ですが、一口に移民と言っても、初期の頃の移民と、もっと時代が下ってから移民とはその性質が異なります。また、多くの移民によって国が形成され、多民族国家となっていたアメリカですが、多民族背景にはそれぞれの民族の排除と受容の歴史があります。そして、その歴史は現代のアメリカが抱える問題を見ていくうえで、また、アメリカという国を考えるうえで重要な鍵となってきました。

そうした移民の辿ってきた歴史と背景を知り、現代のアメリカでの少数民族（マイノリティ）の人々が抱えている問題について考える授業が松崎洋子教授の「アメリカ研究A」です。授業ではこうした問題により親しめるように、また、理解を深めるために映画が用いられています。映像という視覚的な手助けによって、移民の状況をよりよく知ることができます。

毎回、授業では、取りあげられたトピックに関するクイズが出され、その答えを出席票に書いて提出します。そのクイズは、例えば、「ある人種が異国にいて、人街に

住む理由を挙げよ」というものや、「南北戦争での北軍勝利によって黒人奴隷は解放されたが、それに関わらず南部の黒人の生活は苦しいままだった。それはなぜか」といったもので、よく考えてみないとなかなか分からない問題です。このクイズは、「なぜこのような状況が生じているのか」、「こうした問題の背景には何があるのか」といったことを自分で考えてみる助けとなっています。クイズの代わりに感想や意見などを書くときもあります。そのいくつかを次の授業で先生が読んでくれるのですが、他の人が同じ問題についてどのように考えているのか、自分の考えとはどのように違うのかを知ることができ、興味深いです。

授業を通して、一口に移民といっても、それぞれに人種も、アメリカに渡ってきた理由も抱えている問題も異なっているというところ、そして、それぞれの民族が、大変な苦難の歴史を辿ってきているということを感じます。アメリカは「自由の国」と言われ、移民を広く受け入れる「自由を宣言し、多くの移民が自由を求めてやってきたにも関わらず、実際には「自由」も「受容」もなくなくなっていくアメリカの矛盾というものも強く印象づけられました。この授業は、私にとってアメリカという国の側面を知り、考えるきっかけとなっています。

## 卒業生は今

### 皆さんいかがお過ごしですか。

一九九九年卒業生 平松 潤

皆さんいかがお過ごしですか。私は今、仙台に住んでいます。早いもので、敬和学

園大学を卒業してからもうすぐ二年が経とうとしています。大学四年の時、卒業後の進路を考えている中で「アメリカのノースカロライナ州にあるキャンブ・グレイトストーンで国際性を学ぶこと」を決意し、それと同時に「弱い人の友となるという使命感」が生まれました。敬和での生活の中であった多くの喜び、悲しみ、罪、そして赦しがこのようなことを決心させました。

キャンブ・グレイトストーンはクリスチャンのキャンブで、母が結婚前にそこでカウンセラーという働きをしていたことが縁で、そこへ私もメン・スタッフとして行っただけです。私の役割はといいますと、毎日、数百人分の食事を朝、昼、晩と用意するキッチンクルーとしての仕事のほかに、折り紙を教えるクラスを持つということ、ロッククライミングなどの指導の補助などでした。仕事以外の時間には、ゴスペルを歌ったり、友人にいくつもの教会に連れて行ってもらったりと、とても有意義な時を過ごすことができました。アメリカでの生活は、多くのクリスチャンとのふれあいの中、大変実りのあるものでした。

帰国後、私は東北学院大学文学部基督教学科への三年編入学が許され、勉強と教会での様々な活動という充実した毎日を送っています。今の私の生活も敬和での経験が礎となっています。いつも皆さんの祈りによって支えられていることを感謝しています。

私は今、仙台五橋教会に通っていますので仙台にお立ち寄りの際にはどうぞこの教会をお訪ねください。



# 退職される先生方

## 大学と学生諸君と新潟に

### 心からありがとう

国際文化学科教授 大海 宏

一〇年に及んだ私の敬和での人生も近く終わる。大学で教鞭を取る、などとは、それまでほぼ四十年銀行・証券会社の企業戦士だった私には、夢にも思い浮かばなかった人生だった。それは、一九九〇年の初秋、突発的偶然が重なって、あつという間に決まった。

突然転がり込んできた教授の椅子。正直、期待と不安が半々だった。結局私は、「異色」の教授らしく、周りに同化するより自分の特色を出すことで大学に貢献しようという心を決めた。私は、この小さな大学で特色を出そうと思ったら、それはゼミなどと直感した。毎年自分のゼミの充実に力を注いだ。学内で時々不協和音を奏することもあったが、同僚の教職員の皆様は、「素人」の試みに寛大なご理解を示してくださった。

大学では学生こそがクライアントであり主権者である。私はそういう信念で学生たちに奉仕してきたつもりであるが、今振り返ってみると、実は学生たちに与えたものよりも、彼らから与えられたものの方が余程大きかったように思う。教えることは学ぶことだ。この真理を実感している。

特に私のゼミに「厳しいぞ」という風評

を承知で参加してくれた諸君は、良い若者ばかりだった。卒業した後も何かと連絡がある。結婚すれば大抵私を式に呼んでくれる。祝辞も頼まれる。ゼミの卒業生は、同期または全体で、定期・不定期に集まる。私どもは夫婦でそこに招かれる。温泉への一泊旅行が多い。お陰でわれわれ夫婦は県内で二十数カ所もの温泉を経験できた。時とともに成熟してゆくゼミ・OB・OG総計百十六人のネットワークは最高の宝物だ。彼らを通じて新潟という土地も好きになった。東京に住み新潟へ毎週通うという生活を一〇年続けたが、カントリーサイドに館を構え、平日だけロンドンに職を持つ英国貴族に近い満足感と幸福感も味わうことができた。

北垣学長始め大学の教職員の皆様、開学以来の学生諸君、そうして新潟という土地・風物、心からありがとうございました。

## わが新潟時代の終幕

国際文化学科教授 浅野 幸穂

いつしか九年の歳月が流れ、敬和学園大学に別れを告げることになった。この間、家庭の事情から、毎週東京から通うという横着きわまりない勤務を許容して下さった大学当局の寛大さには感謝のほかない。また、実に多くの人々のあたたかいご支援に支えられてきた。一体、どれだけの方々、どれだけの回数、車に便乗させていただいたことか。ありがたいことであつた。

こういうことでなんとか続けてこられたが、もういけない。元来、蒲柳の質であるところへ、体力、気力、何よりも知力の衰えを感じてきたので、これ以上は大学と関係の皆様方のご迷惑になるだけだと思いつた。

三〇年余、研究機関勤務一筋だったので、大学の常勤教員としての勤めはこれが初めてだった。教員として試用期間のような日々が続いたし、今も依然大学人になり切れていない自分を発見する。こういう教師を迎えた学生諸君や保護者の方々は災難だったであろうと慙愧に堪えない次第である。

新潟市にアパートを構えていたので、市民とのお付き合いは結構あつた。ゴミ出しで行き会う主婦の方々、通った食堂の「おとうさん」「おかあさん」、深草の少将よろしく雪の日も通いつめた飲み屋のKさん……。これらのお店のいくつかが高齢やら事業再開やらで店じまいになったことが、「もう潮時だ」とささやいたのだったかもしれない。

臆面もなく、破戒僧の如く非教育的なことばかり語つた。さて、大学も創立一〇周年を超え、校門前の並木も恰好がついて来た。いよいよ青年期に入っていくのである。およそ戦力にならなかつた身が言うべきことではないけれども、「私学冬の時代」というような状況におびえて、本学のような特色ある小規模大学が、あまり幅狭くみずからを規定することがないようにながて、樹木の瑞みずしさを保たせるのではないだろうか。

# 高校生のオーストラリア短期留学

国際文化学科教授 田中利幸

今年の夏休み期間を利用して、敬和学園大学が主催する「高校生のためのオーストラリア短期留学」が実施されました。七月二十三日から八月五日の二週間、新発田市の幾つかの高校から参加した七名の生徒たちが、メルボルン郊外の町ダンデノンでホームステイをしながら、オーストラリアの文化を体験学習するという貴重な経験をしました。

出発前には数回にわたるオリエンテーションが大学で行われ、生徒たちは、オーストラリアの歴史や文化的背景に関する知識や、ホームステイ先の家族との生活において注意すべき様々な生活習慣の違いを学ぶ授業を受けました。

メルボルン滞在期間中は、ホームステイを通して国際交流の推進を行っている現地のボランティア組織の協力を得て、午前中はオーストラリア人による英会話クラスの時間に当てられました。この英会話の授業でも、オーストラリアの文化を紹介しながら英語の知識を増やすような工夫が行われました。午後の活動のためには、敬和学園大学が社会・文化研修のために毎日違った様々なプログラムを独自で組みました。

この研修では、自然博物館、移民歴史博物館、美術館、アボリジニ芸術センター、環境保護団体などでの見学や講演のうえ

に、自然動物園を訪れて、カンガルー、コアラをはじめオーストラリアにしか生息しない珍しい動物に実際に触れながら自然保護について考えるという貴重な体験をしました。また地元の高校を訪れ、体育の授業に参加し、オーストラリアの高校生と楽しく交流するという機会も持ちました。

週末は、各学生がそれぞれのホームステイの家族とともに、ピクニックにでかけたり、家でのパーティーで楽しい時間を過ごしたりしました。生活習慣に関する事前授業の成果もあつてか、大きな問題もなく、生徒たちはホームステイ先の家族にうまく溶け込んで、たいへん友好的な関係を作り上げることができました。滞在最終日には全家族が一同に会して「お別れパーティー」が開かれましたが、文字どおり「涙のお別れ」になるほど、生徒たちはすっかり現地家族の一員になっていました。

短い期間でしたが、参加した生徒たちには忘れられない思い出となり、大きな刺激を受けた研修旅行でありました。



## オープンカレッジ

田中利幸先生の

「戦争と平和を考える」  
近代日本戦争史の批判的検討」  
に参加して

新潟県平和運動センター事務局長 高野秀男

熊本・新潟水俣病事件における行政と企業  
の無責任さは、アジア太平洋戦争の責任所在と戦後処理の曖昧さと共通するのでは？長年水俣病にかかわった私はそうした思いをもつてきました。ここ数年、幕末・明治維新以降に遡って考えなければこの無責任と曖昧さの謎は解けないのではとも考えるようになりました。

ユイコンチャ神奈川大学教授は、近代日本の西欧崇拜、天皇制イデオロギー、アジア蔑視という三つの柱がこの無責任さを作り出し、今も日本人の精神構造となつていると指摘します。田中先生のゼミを受けたのは、その検証ができるという期待からでした。

江戸時代における朝鮮との対等関係にもかかわらず、明治初期、日本は朝鮮に自分たちの政策を押しつけ、日清・日露戦争を行いました。先生はそれらの背景を詳しく説明しました。また、慰安婦問題で、植民地と性の搾取は同時進行するという先生の指摘は、沖縄で繰り返される婦女暴行事件を彷彿とさせ、戦争が人間性破壊に直結する必然性を改めて確認しました。

日本の課題、グローバリゼーションと少子高齢化に対処するためにも歴史認識の共有が不可欠です。敬和学園大学のオープンカレッジに期待しています。

以下、参加者からの感想を掲載いたします。

## 著書紹介

### 神田より著 『神子と修験の宗教民俗学的研究』

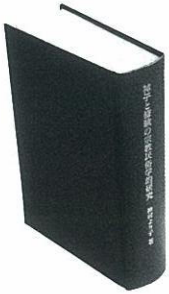
岩田書院 二〇〇一年二月二十八日発行 全八四五頁  
日本山岳修験学会学術賞受賞

学会賞受賞おめでとございます。どのような内容の本なのですか？

修験道と地域社会について、宗教民俗学的立場から考察した博士論文をまとめたものです。特に注目したのは、神子と地域とのかかわりで、一九八二年以来二〇年近く研究を続けてきた内容の集大成です。

興味のきっかけは何だったのですか？

柳田国男の論文「巫女考」の中に、神社で神子舞を舞っている神子は形式化されたもの、という主張があり、かつて私もそう思っていました。しかし、一九八二年宮古市の黒森神社で出会った現役の神子は、この先入観を打ち破るものでした。地域の女性たちの神子を見る眼、神子が語る託宣を聞く態度が真剣でした。その後、岩手県陸中沿岸地方では、神子舞以外にも、ねまり託宣、オシラ遊ばせ、病氣治し、死者の口よせ、など様々なことが行われていることを知りました。当



地の生業の漁業にはもちろん、家庭・社会生活に指針を与えるのは神子でした。

神子の託宣を聞くのは女性のみでした。このように、女性はイエの精神文化の管理者であることがわかったのです。

神子の世界観とはどのようなものですか？

一言でいえば、あの世とこの世は近い、表裏一体ということです。人間生活に深いかかわりをもつ自然、神々や諸霊と死者の託宣を神子から受け取ることによつて、あの世とこの世は地域社会の人々の現実そのものとなるのです。

この本に神田先生はどんなメッセージを込められたのでしょうか？

陸中海岸の人々、特に女性は祈る心を通じて、豊かな精神生活を育んできたということ。現在、神子の高齢化が進み、当地の神子はもう三人しかいません。その意味で、この本は、神子への鎮魂歌としての意味合いを込めて書きました。このような中で、神子に代わるものは何か、誰がそれを引き受けるのか、女性は精神的支柱をどこに求めるのか、まだ予想できません。しかし、このようなものを求める心性というのは根強いのです。それが今後どのような方向へ向かってゆくのか、楽しみでもあります。

ありがとうございます。(編集部)

## 三条市

「子供の人權」(十月二十六日開講)

福王守 助教授

子供が問題を起こしたとき、問題行動そのものよりも、なぜそのようなことをしてしまったのか、またしなければならなかったのかを問題視しなければならぬと先生は主張なさいました。人格形成にとつて、最も重要な幼児期の保育にたずさわっている一人として、今自分ができることを精一杯やり、この講座で学んだことを一緒に働く職員や保護者に伝えていきたいと思いました。

また、自分の息子には、このような人間味のある先生がいらっしやる大学に、是非とも入学させていただき、人間として立派に成長してもらいたいと強く願いました。敬和オーブン・カレッジに参加させてもらい、感謝しています。(K・Iさん)

## 聖籠町

「満映映画」に見る日本人の大陸表象

松本ますみ 助教授

ゼミ形式は、参加者個人の学習に対するレイネスが要求されます。感想を述べるだけでない点で苦勞もありますが、一カ月の短期間(全四回)で集中的に学習に入っていくところが強い印象でした。良いことだと思えました。(お名前不明)

「歩いて、動いて、健康作り」

久島公夫 教授

年齢的にも忘れやすいので、全部コピーしていただいで、後々までそれを見て運動を行うことができます。今まで生活していた中で、「良い」と思っていたことが「悪い」と知って、勉強になりました。小人数方式なので、わからないことを質問することができ、大変良かったと思います。(お名前不明)

# アイヌ文化に踊った学園祭

学生部長 田 中 利 幸

今年も、秋季恒例の「ふれあいバラエティー」が十一月九日に、「敬和祭」が十日、十一日の両日にわたって開かれました。天候にもすこぶる恵まれて、多くの市民の皆さんや卒業生たちがキャンパスを訪れて賑わいました。

今年四月の新学期開始時に、学生たちが組織する「学園祭実行委員会」の委員数が集まらないという問題があり、そのため実行委員会の立直しに時間がかかったため、学園祭の実施が少々危ぶまれる時期もありました。しかしその後、一新した実行委員会の学生諸君が、学生委員会の委員である教員、西村秀雄、岩倉依子両先生を顧問として奮闘努力した結果、最終的にはたいへんよい学園祭のプログラムを企画、実行することができました。



今年の学園祭の「目玉」は、何ととっても「アイヌ文化の紹介」であったことは明らかです。「財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構」の

援助・協力を得て、総勢十五名のアイヌの方々が北海道の平取町の二風谷からお招きすることができました。二風谷はその住民の大部分がアイヌ民族の血を引く人たちで、北海道でもアイヌ文化の保存、伝承と再生活動を最も強く推進している場所として知られています。

学園祭では、アイヌの様々な舞踊と音楽、ユーカラ（叙事物語）などの解説つきの実演が披露され、その後、踊りとムックリと呼ばれる楽器や、アイヌ紋様刺繍、木彫りなどを、アイヌの人たちから教わりながら参加者が実際に自分でやってみる「体験コーナー」も開かれました。アイヌ紋様刺繍と木彫りの体験コーナーにはとりわけ人気があり、好評を博しました。

実は、「財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構」が大学の学園祭でのこうしたアイヌ文化の紹介を行う企画を全面的に援助したのは、敬和祭が初めてでした。つまり言い換えれば、敬和学園大学は学園祭でアイヌ文化紹介をメイン・テーマとした全国で最初の大学であったわけで、この点を私たちはたいへん誇りに思ってもよいわけです。

少々残念だったのは、「テロ問題とアフガン戦争」のようなホットな問題に焦点を当てた講演や学生討論会といった企画がなかったことで、これは実行委員会に考えていただきたい今後の課題です。

# インターンシップを通して

英語英米文学科三年 宮崎和代

八月二十日から二週間にわたり、新発田市役所でのインターンシップに参加させていただきました。私は市民生活課と違い、普段はめつたに行くことがない商工観光課で研修を受け、そこで新発田市の組織、祭りの運営などについて多くのことを学びました。敬和学園大学としても役所でのインターンシップは初めての試みと聞き、どんなことをするのか不安でしたが、実習を終えてみて得たものは想像以上に多かったです。

研修中、農業施策や福祉施策など様々なことについて学びましたが、私はその中でも、「中央商店街活性化」、「工業団地の造成」、「観光業」の三つのテーマに興味を持ち、最終日に市の職員の方とのディスカッションに参加し、意見を発表しました。新発田市では市民と一緒にまちづくりをしようとしています。祭りもそれを通して市民との連携を計るのが課題です。新発田市では現在中心市街地の活気がなくなり少子高齢化が問題となっています。同じ課題を抱えた私の住む豊栄市と新発田市のまちづくりを比べ、私のまちを考える参考に、良い勉強になりました。新発田市でのインターンシップにより、私がいかにどのようなことをしたいこうとするのか、目的を持つことができました。

市役所の皆さんには本当に貴重な時間を割いていただき、忙しいなか親切に指導し

# 二〇〇二年度入学試験中間報告

## 推薦入試が終わりました AO入試面談申込受付中

二〇〇二年度推薦入学試験が去る十一月二十四日(土)に実施されました。指定校推薦、一般推薦合わせて八十二名(英語英米文学科四十一名、国際文化学科四十一名)の受験生を迎えました。この推薦入学試験については慎重な審議の結果、受験生全員が合格と判定されました。

本年度から推薦入試に特待生制度が設けられました。両学科各五名を定員とし、高校三年の一学期までの全体の評定平均値が四・五以上の人が出願できるといいます。特待生で合格すると、入学後一定の成績を修めれば、四年間にわたって授業料が免除されるという大きな特典を受けることができます。この特待生に敬和学園大学生として、勉学面においても生活面においても、他の学生をリードする存在になつてほしいと考えています。本年度は英語英米文学科に九名、国際文化学科に三名の応募がありました。特待生になれなかった志願者も、指定校推薦枠で合格となりました。来年度、特待生として入学する学生たちの活躍に期待したいと思います。

また、編入学(第一次)試験が十月二十日に実施されました。専門学校からの編入も可能になり、三名のうち一名は専門学校からです。今年も教員志望の人が教職課程

(英語)を目指して受験し、合格しました。

さて、昨年度から導入したAO入試も順調に進んでいます。現在までに十七名の合格が決まっています。AO入試は、学力試験を課さず、二度の面談と書類選考によって可否を決定します。面談Ⅰでは本学の教員が教育内容を説明し、大学の施設を一緒に見学します。面談Ⅱでは面談者の個性や関心、将来への希望などを語ってもらいながら、本学がその目標を実現できる場として適切であるか話し合います。その後両者が理解し合ったうえで出願が行われます。一回の面談は三十分から一時間以上にもわたり、手間隙のかかる入試といえます。しかし、面談そのものが「生徒の熱意や人柄までも入学前に分かる良い機会である」との感想が面接した教員から寄せられています。AO入学者のアンケートでも大変好評を博しています。面談は三月三十日まで受け付けています。

これから一般入学試験(A日程、B日程、C日程、センター入試)、編入学(第二次)試験が実施されます。皆さまのお知り合いに大学進学を考えている方がいらっしゃいましたら、是非本学をお勧めいただき、お気軽に入試室までご連絡いただきますようお願い申し上げます。

(入試委員会・入試室)

問合せ先敬和学園大学教務課入試室

☎ 〇二一〇―二六―三六三七

ていただいたことを感謝しています。行政関係には疎いため、理解できなかった部分も多いですが、公務員の仕事は窓口業務などの内部事務だけでなく、外での作業もするということがわかり勉強になりました。祭りに関しては祭りの語源や目的、どのよう運営されていくか、今までそういった面から見たことがなかったので興味深く、また、台輪に乗せていただいたり、民謡流しに参加させていただいたりしたことは貴重な体験でよい思い出となりました。祭りの作業では、何をしたらいいか指示を待つばかりで自分の判断で行動できず、皆さんには迷惑をかけてしまい申し訳なかったと思います。指示を待つばかりでなく自分からその仕事を応用して動けるようにならなくてはいいなと思いました。しかしどこまで自己判断で行動するかは難しく、今後の私の課題となりました。いろいろ考えさせられることも多く、社会に出るための良いステップとなりました。



# クリスマス礼拝

今年も燭火礼拝は、北嶋藤郷英語英米文学科長と石川喜一国際文化学科教授のキャンドル点火とともに始まりました。本法人理事で日本キリスト教団阿佐ヶ谷教会牧師の大宮薄先生の心に染みる説教「光は闇の中で輝く」のち、北垣宗治学長から二〇〇一年度ケリー・ニューエル奨学金受給者



山本まゆみ、二〇〇一年度エッセイコンテスト（応募作品百三十七本）受賞者李蕾（学長賞「神様との出会い」）、天木美佳（チャペル賞「アガペ」とエロスについて）、麦倉のぞみ（アッセンブリー賞「CAHについて」）、高

野健吾（同「テロと貧困」）に賞状と賞金が授与されました。

例年のごとく、特別養護老人ホーム二の丸、県立新発田病院へのクリスマス・キャロリング慰問聖歌隊の歌声は、ブラスバンド部の名演奏とともに、「今までで一番良いハーモニーでした」と言われるほど、主の降誕を祝って、人々の心へと伝わりました。一人の患者さんから涙ながらの謝辞をいただきました。一同大学に戻り、軽音楽部の諸君の用意した軽食と音楽の饗応に、感激して、親睦の時をゆくりなく過しました。

（宗教部長 延原時行）

## 討報

### 森君との思い出

英語英米文学科三年 辰巳 智一

僕が森君と初めて出会ったのは、少林寺拳法のサークルでした。森君は、その時は既に病気を患っていましたが、みんなに何も言わずに基本（突き、蹴り）の練習などを一生懸命していました。弱音など一度もはかずに頑張っていました。そして、一年生の夏合宿にも参加しました。合宿が終わってから病気が重くなり、部活に來れなくなり、自転車にも乗れなくなりました。

字を書けなくなっていたからは、テープに授業の内容を全て録音していました。そのテープは森君の家にたくさんありました。車椅子で移動しなければならなくなるまで、頑張って大学に來ていましたが、車椅子になつてからは、それもできなくなり、家にいるようになりました。

僕は森君ととても仲が良く、何でも話合いました。森君は、とてもまじめで素直でした。一年生の少林寺拳法の三級の試験のときも真剣に取り組んでいました。森君とは、新発田まつりの民謡流しも、飲み会のときもいつも一緒だったので、森君が亡くなったことを聞いたときはとても信じられない気持ちでした。

二〇歳で亡くなるのは早すぎ、とても残念です。森君に対してもっと何かしてあげられることがなかったかとやまれます。森君は、短い生涯を終えました。でも精一杯生き抜いたのでないかと思えます。

### 共に過ごした六年半

国際文化学科四年 須藤 美幸

はまちゃん（浜田綾子さん）との出会いは、高校一年。同じ通学パスが縁でした。その後大学で同じゼミになったこともあり、自然と一緒にいる時間は多くなりました。

大らかで頑張り屋、そして可愛いらしいはまちゃんは、ゼミ内のデイベートへの参加率はトップ、レポート提出期限に遅れた事はありません。特にゼミ合宿のデイベート準備では、毎晩深夜まで黙々と勉強していました。そして、そんな一生懸命な姿の中でたまに見せるうっかりミスが、友人たちの間では可愛いと評されていました。本人は本意だったようですが、それこそがはまちゃんの持ち味で、先輩にも一番可愛がられていました。

そのはまちゃんが突然亡くなりました。最後に会ったのは卒業写真の個人撮影の日。少ししか言葉が交わさなかったことが悔やまれてなりません。卒業後は専門学校への進学が決まっています、それを楽しみにしていたのに。

はまちゃんとの関係には、特に劇的なものではなく、普通の友人として互いに対等に接していました。学校が大好きで懸命に勉強してきたはまちゃん。きっと私たちと一緒に卒業できないことが一番心残りでしょう。はまちゃんは、多くの思い出を大学と友人の間に残しました。そんなはまちゃんだけを残して卒業はできません。友人として、来年一緒に卒業していきたいと思っています。

# 敬和学園大学同窓会総会・懇親会開催

敬和学園大学同窓会長 米山光紀

敬和祭に合わせて卒業生が母校に帰ってくる、そんな習慣がつけばと思って始めた大学で開催する同窓会総会も今回で三回目となりました。今年は、十一月十日（土）敬和祭一日目に開催し、今年ならではの試みとして、卒業生も敬和祭に来やすいようにと有志で「とやまんカレー」「必殺学生仕事人上映会」を学園祭に出展してもらうことができました。これにより敬和祭の更なる盛り上がりと卒業生が気楽に母校に立ち寄れる雰囲気作りはできたと思います。

実際、同窓会活動を一年に二回報告して、これからの同窓会を考えていく場になるべき総会はというと、出席者は少なく寂しいものがありました。ぜひ年に一度くらいは同窓会の存在を認識していただき忘れたん

ない意見を寄せて欲しいものです。しかし、同日六時から新潟市で開催した懇親会には約三十人の同窓生などが遠くは九州・関東から集まり、学長を囲んで近況の交換や懐かしい話に花を咲かせることができました。懐かしい顔ぶれや先輩後輩の一社会人となつての交流の場として、これからも少しずつでも人数を増やして開催を続けられればと心から思いました。総会や懇親会の様子はホームページに掲載してあります。ぜひアクセスしていただき今年の雰囲気を感じ取ってもらい、来年は皆さんが友達を誘って参加して下さいる事を祈っています。

ホームページアドレス

<http://www.keiwa-c.com/>



## 学事予告



- ◆ 一月 ◆
  - 八 日 講義再開
  - 十六 日 後期講義終了
  - 十七 日 補講日（二十三日）
  - 二十四 日 後期末試験
  - 二十六 日 外国人留学生入学試験
- ◆ 二月 ◆
  - 一 日 一般入学試験（A日程）
  - 二 日 一般入学試験（B日程）
  - 九 日 春期休暇（三月三十一日）
  - 十二 日 後期集中講義（十五日）
  - 二十二 日 編入学試験（第二次）
- ◆ 三月 ◆
  - 八 日 一般入学試験（G日程）
  - 二十 日 卒業式
  - 三十一 日 学年終わり

## 寄付者ご芳名

- 一 般
  - 森民男、小川文勝、本間強、中条聖心幼稚園、
  - 日本基督教団新潟地区壮年部、
  - オレンジ会、後援会
- 一九九一組
  - 塩谷真澄
- 一九九五組
  - 洪川伸一、荒木陽子
- 一九九六組
  - 須貝洋人

# キャンパス日誌

## 10月

- 1日 新発田商業高校 高大連携講座②
- 3日 人文社会科学研究所連続講演会①  
(新発田市生涯学習センター)  
講師：作家 小田実氏 「テロに対する報復戦争は正当か？」  
聖籠町オープン・カレッジ (10/10、17、24)  
講師 久島公夫 教授 「歩いて動いて健康作り」
- 5日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑬  
説教 盛永進 ロンドンJCF牧師「アガペとエロス」
- 9日 新発田商業高校 高大連携講座③
- 10日 教授会
- 12日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑭  
説教 延原時行 宗教部長 「反テロリズムと人間性」  
講演 石川喜一 研究所長  
「世界の研究所あれこれ 高慢と偏見による観察」
- 16日 新発田市オープン・カレッジ (10/23、30、11/6)  
講師 浅野幸穂 教授  
「インドネシア情勢の背景—スハルトの「私の履歴書」  
(日経新聞所載) を読む—」
- 17日 新発田市オープン・カレッジ (10/24、31、11/7)  
講師 野崎秀雄 職人獅子舞保存会長他、神田より子 教授  
「新発田まつりを科学する」  

- 18日 聖籠町オープン・カレッジ① (10/25、11/1、8)  
講師 ジェームズ・ブラウン 助教授  
「アメリカと日本：歴史、外交、経済」
- 19日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑮  
説教 四竈揚 徑堂北教会牧師  
「不思議な結婚式—一味きない時間を豊かに」  
三条市オープン・カレッジ①  
講師 映画監督 小林茂氏 「映画で見る子育て」
- 20日 編入学試験 (第1次)
- 21日 実用英語検定試験 (38名受験)
- 23日 新発田商業高校 高大連携講座④
- 24日 人文社会科学研究所連続講演会②  
講師 ガヴァン・マコーマック  
オーストラリア国立大学教授  
「日本経済の崩壊の原因を探る：  
土建国家の行末」  



- 教授会
- 25日 編入学試験 (第1次) 合格発表
- 26日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑯  
説教 延原時行 宗教部長  
「信仰とは、<なにものか>になることではない」  
講演 田中利幸 学生部長  
「アフガン戦争批判：テロと貧困を考える」  
三条市オープン・カレッジ②  
講師 福王守 助教授 「子どもの人権」
- 29日 献血
- 30日 新発田商業高校 高大連携講座⑤
- 31日 大学教育会議

## 11月

- 2日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑰  
説教 山田耕太 教授 「キリスト教と「聖戦」? 「反戦」」  
講演 柴沼晶子 図書館長 「図書館での出会い」

- 2日 企業との就職懇談会 (ホテル新潟)  
三条市オープン・カレッジ③  
講師 スクールカウンセラー 今成京子氏  
「発達相談」から見た地域における子育て」
- 6日 新発田商業高校 高大連携講座⑥
- 9日 編入学試験 (第1次) 入学手続き締切  
ふれあいバラエティー



- 三条市オープン・カレッジ④  
「パネルディスカッション」  
パネラー 永野茂洋教授、ジェームズ・ブラウン助教授、  
松本すみみ助教授、金山愛子助教授  
司会 杉村使乃 専任講師
- 10日 第11回敬和祭 (～11日)
- 13日 新発田商業高校 高大連携講座⑦
- 14日 人文社会科学研究所連続講演会③  
講師 アジア女性資料センター代表  
松井やより氏  
「慰安婦問題の歴史と現状」  


- 16日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑰  
説教 延原時行 宗教部長 「滝沢克己の発見」  
講演 マリオ・ベルベリシ宣教師 「日本とイタリアの文化の間で」
- 20日 新発田商業高校 高大連携講座⑧
- 21日 人文社会科学研究所連続講演会④  
講師 都留文科大学教授 笠原十九司氏  
「戦争の記憶をどう伝えるか」  
大学教育会議

- 24日 推薦入学試験
- 28日 人文社会科学研究所連続講演会⑤  
講師 ヒーブルス・ブラン 研究所共同代表 武藤一羊氏  
「東アジアの非軍事化へ向けての市民運動の展望」  
教授会
- 29日 新発田商業高校 高大連携講座⑨
- 30日 推薦入学試験合格発表  
チャペル・アッセンブリー・アワー⑱  
説教 金承哲 南山大学南山宗教文化研究所客員研究員  
「キリスト教における差異の一致」  
人文社会科学研究所・キリスト教と教育委員会  
会共催講演会  
講師 金承哲 南山大学南山宗教文化研究所客員研究員  
「韓国キリスト教の自己理解と日本神学—宗教  
神学の立場から」  
理事会・評議員会

## 12月

- 4日 新発田商業高校 高大連携講座⑩  
大学後援会役員
- 7日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑳  
説教 スーザン・アダムス 敬和学園高校付宣教師  
「Where is the Ocean? Where is Life?」  
講演 新潟水俣病訴訟支援者 旗野秀人氏  
「阿賀のほとりて」
- 8日 英語科教育法カリキュラム開発研究会  
研究実践報告会
- 12日 教授会
- 14日 クリスマス行事
- 19日 大学教育会議
- 22日 大学・高校クリスマス合同研修会  
冬期休暇 (～1月8日)